

モンマルトルのパリ市立／アル／サン／ピエール美術館企画2011年1月まで日本の「生の芸術」展が開催され大変な反響、話題になつてゐる。

しかしながらその芸術が市民権をえるまでの長い苦闘の歴史を振り返ると「生の芸術」の置かれた立場が根強い偏見に取り巻かれ容易にその強固な鎧を脱ぐうとしない。生の芸術」はナイーブ、素人絵画、とひとまとめにされ、当初は精神異常錯乱と結び付けられ根強い偏見に支配され美術界の濃霧をはらうのけることが出来ないでいる。

まして苦難の時期を経過してやつと現代美術の原点としての名誉をかくとくするまでにいたる。創造の原点、でありながらも今でも、なかなか画壇の表舞台に出れないのはその芸術本来の、慎ましやかな、かくれて密室で創作される絵、個性が強すぎて社交界にうけいれられない、その作風によるに違いない。自分の恥部をのぞきみられることを恐れるかのように展示作品のまえを素早くとおりすぎる人々にあたえる衝撃、不快感、恐怖感、行き詰まる空間構成、癒しの美から遠い挑発的な芸術だ。郷愁、喜怒哀楽の感情をくみとるまでにいたるには日常の価値観をしてくる必要がある。

この美術館館長の挨拶文にめをとおす。「アール・ブリュットはアートという見解でも特殊な分野で現在は非常に幅広いアートをさすことばとして使われる。苦しんで苦しんで自分が生きるためにつくる。止むに止まらず、自分がいきるためにつくり、一度作品を創りはじめると生涯やめることができない。人知れずそつとつくる。文化の影響を受けない純粹なクリエーションがアール・ブリュット(生の芸術)の原点

で現代アートの枠の外にあるマージナルなアートとほなにか、クリエーションとはなにか？を現代人に問う。収益性、有用性などが重視される現代のなかでクリエーションの意味を考える機会でもある。」

西洋文化が狂気の知覚を、人間が動物に抱く想像上の諸形式に関連させることは西洋文化にとつて本質的な事柄であったに違いない。長い間、人間を理性的動物と定義し狂気は凶暴な動物性として考えてきた。そしてこれがヨーロッパの「生の芸術」感の根底を成す。

生の芸術がとりあつかわれるようになるまでには多くの逆流が必要だつた。無意識に興味を抱く芸術家に追従したのは心理学者が最初だ。社会学者、民俗学者、そして単なる病理学の表明でしかないと思われて来たものを芸術の高見にまで引き上げた知識人たちによる。こうして精神病理学的芸術が誕生した。

密室絵画——理性と非理性の狭間、隠れて夢想しそれらをこの眼で確認する作業、今日生の芸術をアルブリミニチーブと同一に扱うとはいえない。透明でつかの間の、実生活の地層から免除去れた子ども達の芸術と、多義に渡る民族芸術、生活が舞台で、光りに充ちている宗教絵画などと、生の芸術の創作者は彼らのやみ、抱える、のヴィジョンでしかない。独学にもとづく芸術でもない。生得のもの本来のものなのだ。肉体の病理学は、特異性に富む個人のあがれへの道を開き、人間の本質に根ざした表現の自由を発見した芸術家からおおくを学んだ。ぶつしつと精神が問題となる物の本質について示唆をあた

える。

「現代アートは作品に意味を与えない作品を創り、人間不在が目に付く。人間のもうひとつの側面に注目してそれを突き詰めていくアート、精神面のみを重視して作品をつくる。アール・ブリュットは現代アートと対極にあり、人間には心があり、感情があり、からだがある、それらすべてを駆使して作品をつくる。偽物のアール・ブリュットが氾濫する。子供ぽい絵を描いたり、賑やかな色使いをしたり、一度捨てたものをつかつたり、そういう技術は簡単にまなべるので、それを駆使したアール・ブリュットとの偽物つくりが起つていて。作り手は非常な器用名アーチストたちです。」という館長の言葉は言い過ぎだとしども、分けがたく密接に結びついてる創作のかすかな、あるいは確固とした相異点を見つける」ことができるだろうか。(二)でパスカルの言葉を引用しておこう。「人間が狂気じみているのは必然的であるので狂気じみていない」とも、別種の狂気の傾向からいふと、やはり狂気じみていふことになるだらう」

2010年7月28日ヴィリエ、宇津宮 功